

令和7年度 筑波大学 2次試験前期日程 (数学問題)120分

- 総合選抜文系は [1] [2] [3] から2題選択 (数II・B・C), 及び他教科との選択
- 総合選抜理系I, 理系II, 理系IIIは [1] [2] [3] から2題選択,
[4] [5] [6] から2題選択
- 社会学類は [1] [2] [3] から2題選択 (数II・B・C), 及び他教科との選択
- 国際総合・障害科学類は, 数II・B選択の場合は [1] [2] [3] から2題選択,
数III選択の場合は [4] [5] [6] から2題選択, 及び他教科との選択
- 教育・心理学類・生物資源・生物・地球・数学・物理・化学・応用理工・工学
システム・情報科学・情報メディア創生学類・知識情報・図書館学類・社会工
学類・医学・医療学類は [1] [2] [3] から2題選択, [4] [5] [6] から2題選択

1 実数の組 (a, r) に関する以下の条件 (A) を考える.

(A) 初項 a , 公比 r の等比数列 $\{a_n\}$ は, すべての正の整数 n について $\tan a_{n+1} = \tan 3a_n$ を満たす. ただし, いずれの正の整数 n に対しても, a_n および $3a_n$ は $\frac{1}{2}\pi + k\pi$ (k は整数) の形でない.

- (1) 組 (a, r) が条件 (A) を満たすとき, $\tan ar = \tan 3a$ および $\tan ar^2 = \tan 3ar$ が成り立つことを示せ.
- (2) 組 (a, r) が条件 (A) を満たし, かつ $\frac{a}{\pi}$ が無理数であるとき, $r = 3$ であることを示せ.
- (3) 組 $\left(\frac{2}{5}\pi, r\right)$ が条件 (A) を満たすとき, r は整数であることを示せ.
- (4) $1 \leq r \leq 10$ を満たす r で, 組 $\left(\frac{2}{5}\pi, r\right)$ が条件 (A) を満たすものをすべて求めよ.

2 正の実数 p に対して, $f(x) = x^3 - x + p$ とする.

- (1) x についての方程式 $f(x) = 0$ がただ1つの実数解をもつとき, p のとりうる値の範囲を求めよ.
- (2) a, b, c は実数で, $c > 0$ とする. また, i を虚数単位とする. $a, b+ci, b-ci$ が方程式 $f(x) = 0$ の解であるとき, a, c, p をそれぞれ b を用いて表し, b のとりうる値の範囲を求めよ.
- (3) (2) の b, c について, 少なくともどちらか一方は整数でないことを示せ.

- 3 座標平面において円 $(x-1)^2 + (y-1)^2 = 1$ を C とする. a を 1 より大きい実数とし, 2 点 $A(2a, 0)$, $B(-a, 0)$ をとる. 点 A を通る円 C の 2 本の接線のうち傾きが小さい方を l_1 とし, 点 B を通る円 C の 2 本の接線のうち傾きが大きい方を l_2 とする. l_1 と l_2 の交点を D とする.

- (1) 直線 l_1 の方程式を a を用いて表せ.
- (2) 点 D から x 軸へ下ろした垂線と x 軸の交点を H とする. $\triangle BDH$ と $\triangle ADH$ の面積の比が $5:4$ であるとき, a の値を求めよ.
- (3) a が (2) で求めた値であるとき, $\angle ADB = \frac{\pi}{2}$ であることを示せ. また, $\triangle ABD$ の外接円の中心と半径を求めよ.

- 4 i を虚数単位とする. a は 1 でない正の実数の定数とする. 複素数平面において, 方程式 $|z - a^2i| = a|z - i|$ を満たす点 z が表す図形を C とする.

- (1) 図形 C は原点 O を中心とする円であることを示し, その半径を求めよ.

以下の問いでは点 z は円 C 上を動くとし, z の偏角を θ とする. ただし $0 \leq \theta < 2\pi$ とする. また, $w = z - \frac{1}{z}$ とおく.

- (2) $|w - 2i|^2$ を a と $\sin \theta$ を用いて表せ.
- (3) $|w - 2i| + |w + 2i|$ は点 z の位置によらない定数であることを示せ.

5 $f(x) = \frac{\sin(\log x)}{x}$ ($x > 1$) について以下の問いに答えよ.

- (1) $f'(x)$, $f''(x)$ を求めよ.
- (2) n を正の整数とする. 関数 $f(x)$ が極大値をとる x で, $e^{2(n-1)\pi} < x < e^{2n\pi}$ となるものがただ1つ存在することを示せ. また, 関数 $f(x)$ が極小値をとる x で, $e^{2(n-1)\pi} < x < e^{2n\pi}$ となるものがただ1つ存在することを示せ.
- (3) 正の整数 n に対して, (2) の極大値をとる x を α_n , 極小値をとる x を β_n とする. このとき,

$$\frac{1}{\pi} \left\{ \log \left| \sum_{n=1}^{\infty} f''(\alpha_n) \right| - \log \left| \sum_{n=1}^{\infty} f''(\beta_n) \right| \right\}$$

は整数となる. その値を求めよ.

6 $f(x) = \sqrt{x}e^{-\frac{x^2}{4}}$ ($x \geq 0$) とし, $\alpha = \int_0^5 f(x) dx$ とする.

- (1) $f(x)$ ($x \geq 0$) が最大値をとることを示し, その値 M を求めよ.
- (2) $0 \leq x \leq 5$ において $e^{-\frac{25}{4}}\sqrt{x} \leq f(x)$ を示せ. また, $\frac{10}{3}f(5) \leq \alpha$ を示せ.
- (3) M は (1) で求めたものとし, 実数 t は $\frac{2}{3}f(5) \leq t \leq M$ の範囲を動くとする. 曲線 $y = f(x) - t$ ($x \geq 0$), 2直線 $x = 0$, $x = 5$, および x 軸で囲まれた図形を, x 軸の周りに1回転させてできる回転体の体積を $V(t)$ とする. $V(t)$ の最小値を α を用いて表せ.

解答例

1 初項 a ，公比 r の組 (a, r) の等比数列 $\{a_n\}$ が，すべての正の整数 n について

$$\tan a_{n+1} = \tan 3a_n$$

を満たすから，上式に $a_{n+1} = ar^n$ ， $a_n = ar^{n-1}$ を代入すると

$$\tan ar^n = \tan 3ar^{n-1} \quad (*)$$

(1) $(*)$ に $n = 1, 2$ をそれぞれ代入すると

$$\tan ar = \tan 3a, \quad \tan ar^2 = \tan 3ar$$

(2) $(*)$ から，整数 I_n を用いて $ar^n - 3ar^{n-1} = I_n\pi$

$$\frac{a}{\pi}r^{n-1}(r-3) = I_n$$

上式に $n = 1, 2$ をそれぞれ代入すると

$$\frac{a}{\pi}(r-3) = I_1, \quad \frac{a}{\pi}r(r-3) = I_2 \quad (\text{P})$$

$r-3 \neq 0$ とすると，(P) の第 1 式において $\frac{a}{\pi}$ が無理数であるから， $a \neq 0$ より， $I_1 \neq 0$ である．(P) の第 2 式を第 1 式の辺々で割ると $r = \frac{I_2}{I_1}$

これから， r は有理数である．(P) の第 1 式から

$$\frac{a}{\pi} = \frac{I_1}{r-3}$$

上式の左辺は無理数，右辺は有理数となり矛盾．したがって

$$r-3=0 \quad \text{すなわち} \quad r=3$$

(3) (*) に $a = \frac{2}{5}\pi$ を代入すると $\tan \frac{2}{5}\pi r^n = \tan \frac{6}{5}\pi r^{n-1}$

整数 J_n を用いて $\frac{2}{5}\pi r^n - \frac{6}{5}\pi r^{n-1} = J_n\pi$

$$\frac{2}{5}r^{n-1}(r-3) = J_n$$

上式に $n = 1, 2$ をそれぞれ代入すると

$$\frac{2}{5}(r-3) = J_1, \quad \frac{2}{5}r(r-3) = J_2 \quad (\text{Q})$$

(Q) の第 1 式から $r = \frac{5}{2}J_1 + 3$

r が整数でないと仮定すると, J_1 は奇数である. (Q) の 2 式から

$$J_1 \left(\frac{5}{2}J_1 + 3 \right) = J_2 \quad \text{ゆえに} \quad J_1(5J_1 + 6) = 2J_2$$

上の第 2 式において, 左辺は奇数, 右辺は偶数となり矛盾.

r は整数となるから, (Q) の第 1 式より

$$\frac{2}{5}(r-3) = J_1 \quad \text{ゆえに} \quad r-3 \equiv 0 \pmod{5}$$

よって, r は, $r \equiv 3 \pmod{5}$ を満たす整数である.

(4) (3) の結論から, $1 \leq r \leq 10$ を満たす r で組 $\left(\frac{2}{5}\pi, r \right)$ を満たすものは

$$r = 3, 8$$



2 (1) $f(x) = x^3 - x + p$ より $f'(x) = 3x^2 - 1$

$$f'(x) = 0 \text{ とすると } x = \pm \frac{1}{\sqrt{3}}$$

x	$\cdots$	$-\frac{1}{\sqrt{3}}$	$\cdots$	$\frac{1}{\sqrt{3}}$	$\cdots$
$f'(x)$	$+$	0	$-$	0	$+$
$f(x)$	$\nearrow$	極大	$\searrow$	極小	$\nearrow$

$$p > 0 \text{ より 極大値 } f\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}\right) = p + \frac{2\sqrt{3}}{9} > 0,$$

$$\text{極小値 } f\left(\frac{1}{\sqrt{3}}\right) = p - \frac{2\sqrt{3}}{9}$$

$f(x) = 0$ がただ 1 つの実数解をもつから、極小値について

$$p - \frac{2\sqrt{3}}{9} > 0 \quad \text{よって} \quad p > \frac{2\sqrt{3}}{9}$$

(2) 解と係数の関係により

$$a + (b + ci) + (b - ci) = 0$$

$$a(b + ci) + (b + ci)(b - ci) + (b - ci)a = -1$$

$$a(b + ci)(b - ci) = -p$$

$$\text{ゆえに } a + 2b = 0, \quad 2ab + b^2 + c^2 = -1, \quad a(b^2 + c^2) = -p \quad (*)$$

(*) の第 1 式から $a = -2b$ これを (*) の第 3 式に代入すると

$$-2b(b^2 + c^2) = -p \quad \text{ゆえに} \quad p = 2b(b^2 + c^2) \quad \cdots \textcircled{1}$$

$p > 0$ であるから $b > 0$

$a = -2b$ を (*) の第 2 式に代入すると

$$2(-2b)b + b^2 + c^2 = -1 \quad \text{ゆえに} \quad c^2 = 3b^2 - 1 \quad \cdots \textcircled{2}$$

$$b, c > 0 \text{ であるから } c = \sqrt{3b^2 - 1}, \quad b > \frac{1}{\sqrt{3}}$$

$$\textcircled{2} \text{ を } \textcircled{1} \text{ に代入すると } p = 2b(4b^2 - 1)$$

(3) b, c がともに整数であるとする、 $c^2 = 3b^2 - 1$ より

$$c^2 \equiv -1 \equiv 2 \pmod{3}$$

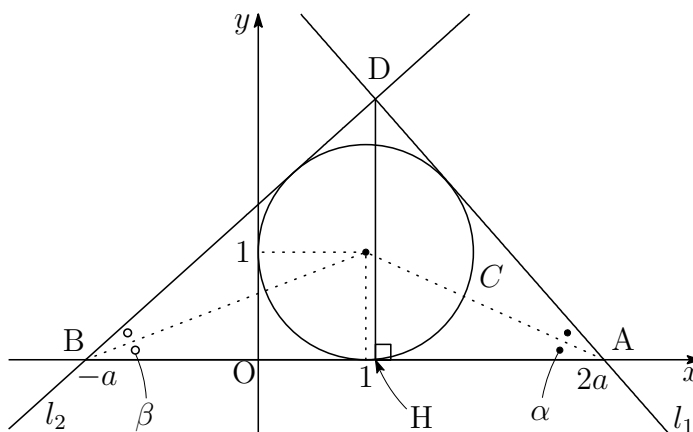
$c \equiv 0, \pm 1 \pmod{3}$ について、 $c \not\equiv 2 \pmod{3}$ であるから、上式は成立しない。よって、 b, c の一方は整数ではない。 ■

3 (1) $\angle DAB = 2\alpha$ とすると $\tan \alpha = \frac{1}{2a-1}$

$$\tan 2\alpha = \frac{2 \tan \alpha}{1 - \tan^2 \alpha} = \frac{2 \cdot \frac{1}{2a-1}}{1 - \left(\frac{1}{2a-1}\right)^2} = \frac{2(2a-1)}{(2a-1)^2 - 1} = \frac{2a-1}{2a(a-1)}$$

直線 l_1 の傾きは $-\tan 2\alpha$ であるから、その方程式は

$$y = -\frac{2a-1}{2a(a-1)}(x-2a)$$



(2) $\angle DBA = 2\beta$ とすると $\tan \beta = \frac{1}{1+a}$

$$\tan 2\beta = \frac{2 \tan \beta}{1 - \tan^2 \beta} = \frac{2 \cdot \frac{1}{1+a}}{1 - \left(\frac{1}{1+a}\right)^2} = \frac{2(1+a)}{(1+a)^2 - 1} = \frac{2(1+a)}{a(a+2)}$$

$$\angle ADH = \frac{\pi}{2} - 2\alpha, \quad \angle BDH = \frac{\pi}{2} - \beta \text{ より}$$

$$\tan \angle ADH = \frac{2a(a-1)}{2a-1}, \quad \tan \angle BDH = \frac{a(a+2)}{2(1+a)}$$

$$\triangle BDH : \triangle ADH = \tan \angle BDH : \tan \angle ADH = 5 : 4 \text{ より } (a > 1)$$

$$\frac{a(a+2)}{2(1+a)} : \frac{2a(a-1)}{2a-1} = 5 : 4 \quad \text{整理すると} \quad a^2 - a - 1 = 0 \quad (*)$$

$$a > 1 \text{ に注意して解くと} \quad a = \frac{1 + \sqrt{5}}{2}$$

(3) (*) より, $a^2 = a + 1$ であるから

$$\begin{aligned}\tan 2\alpha &= \frac{2a-1}{2a^2-2a} = \frac{2a-1}{2(a+1)-2a} = \frac{2a-1}{2} \\ \tan 2\beta &= \frac{2(1+a)}{a^2+2a} = \frac{2(1+a)}{(a+1)+2a} = \frac{2(1+a)}{3a+1}\end{aligned}$$

上の 2 式から

$$\begin{aligned}\tan 2\alpha \tan 2\beta &= \frac{2a-1}{2} \cdot \frac{2(a+1)}{3a+1} = \frac{(2a-1)(a+1)}{3a+1} \\ &= \frac{2a^2+a-1}{3a+1} = \frac{2(a+1)+a-1}{3a+1} = 1\end{aligned}$$

$\angle DAB + \angle DBA = 2\alpha + 2\beta = \frac{\pi}{2}$ であるから

$$\angle ADB = \pi - (\angle DAB + \angle DBA) = \pi - \frac{\pi}{2} = \frac{\pi}{2}$$

AB は $\triangle ABD$ の外接円の直径であるから, 中心は AB の中点 $\left(\frac{a}{2}, 0\right)$, 半径は $\frac{3a}{2}$ より

$$\text{中心} \left(\frac{1+\sqrt{5}}{4}, 0 \right), \quad \text{半径} \frac{3(1+\sqrt{5})}{4}$$

■

4 (1) $|z - a^2i| = a|z - i|$ より $|z - a^2i|^2 = a^2|z - i|^2$

$$(z - a^2i)(\bar{z} + a^2i) = a^2(z - i)(\bar{z} + i)$$

整理すると $(1 - a^2)|z|^2 = a^2(1 - a^2)$

$a > 0$, $a \neq 1$ であるから, $1 - a^2 \neq 0$ より

$$|z|^2 = a^2 \quad \text{すなわち} \quad |z| = a$$

よって, C は原点を中心とする半径 a の円である.

(2) z の偏角が θ であるから, (1) の結果から

$$z = a(\cos \theta + i \sin \theta) \quad (0 \leq \theta < 2\pi)$$

したがって $w = z - \frac{1}{z} = a(\cos \theta + i \sin \theta) - \frac{1}{a}(\cos \theta - i \sin \theta)$

$$= \left(a - \frac{1}{a}\right) \cos \theta + \left(a + \frac{1}{a}\right) i \sin \theta$$

$$w \pm 2i = \left(a - \frac{1}{a}\right) \cos \theta + \left\{\left(a + \frac{1}{a}\right) \sin \theta \pm 2\right\} i \quad \text{より (複号同順)}$$

$$\begin{aligned} |w \pm 2i|^2 &= \left(a - \frac{1}{a}\right)^2 \cos^2 \theta + \left\{\left(a + \frac{1}{a}\right) \sin \theta \pm 2\right\}^2 \\ &= \left(a - \frac{1}{a}\right)^2 (1 - \sin^2 \theta) + \left(a + \frac{1}{a}\right)^2 \sin^2 \theta \pm 4 \left(a + \frac{1}{a}\right) \sin \theta + 4 \\ &= \left(a - \frac{1}{a}\right)^2 + 4 + \left\{\left(a + \frac{1}{a}\right)^2 - \left(a - \frac{1}{a}\right)^2\right\} \sin^2 \theta \pm 4 \left(a + \frac{1}{a}\right) \sin \theta \\ &= \left(a + \frac{1}{a}\right)^2 + 4 \sin^2 \theta \pm 4 \left(a + \frac{1}{a}\right) \sin \theta = \left(a + \frac{1}{a} \pm 2 \sin \theta\right)^2 \end{aligned}$$

よって $|w - 2i|^2 = \left(a + \frac{1}{a} - 2 \sin \theta\right)^2$

(3) $a + \frac{1}{a} \pm 2 \sin \theta = \left(\sqrt{a} - \frac{1}{\sqrt{a}}\right)^2 + 2(1 \pm \sin \theta) > 0$ であるから

$$|w \pm 2i| = a + \frac{1}{a} \pm 2 \sin \theta \quad \text{(複号同順)}$$

よって $|w - 2i| + |w + 2i| = 2 \left(a + \frac{1}{a}\right)$ ■

5 (1) $f(x) = \frac{1}{x} \sin(\log x)$ より ($x > 1$)

$$\begin{aligned} f'(x) &= -\frac{1}{x^2} \sin(\log x) + \frac{1}{x} \cdot \frac{1}{x} \cos(\log x) \\ &= \frac{1}{x^2} \{-\sin(\log x) + \cos(\log x)\}, \\ f''(x) &= -\frac{2}{x^3} \{-\sin(\log x) + \cos(\log x)\} \\ &\quad + \frac{1}{x^2} \cdot \frac{1}{x} \{-\cos(\log x) - \sin(\log x)\} \\ &= \frac{1}{x^3} \{\sin(\log x) - 3\cos(\log x)\} \end{aligned}$$

(2) (1) の結果から $f'(x) = -\frac{\sqrt{2}}{x^2} \sin\left(\log x - \frac{\pi}{4}\right)$

$\log a_n - \frac{\pi}{4} = 2(n-1)\pi$, $\log b_n - \frac{\pi}{4} = 2(n-1)\pi + \pi$ とおくと

x	$e^{2(n-1)\pi}$	$\dots$	a_n	$\dots$	b_n	$\dots$	$e^{2n\pi}$
$f'(x)$		+	0	-	0	+	
$f(x)$		$\nearrow$	極大	$\searrow$	極小	$\nearrow$	

よって、関数 $f(x)$ は、 $e^{2(n-1)\pi} < x < e^{2n\pi}$ において (n は正の整数), 極大値および極小値をそれぞれ 1 つずつとる.

別解 (1) の結果から $f'(x) = -\frac{\sqrt{2}}{x^2} \sin\left(\log x - \frac{\pi}{4}\right)$
 $f'(x) = 0$ ($e^{2(n-1)\pi} < x < e^{2n\pi}$) の 2 つ解 a_n, b_n を

$$\log a_n - \frac{\pi}{4} = 2(n-1)\pi, \quad \log b_n - \frac{\pi}{4} = 2(n-1)\pi + \pi$$

とおくと, (1) の結果から

$$\begin{aligned} f''(a_n) &= \frac{1}{a_n^3} \{\sin(\log a_n) - 3\cos(\log a_n)\} = -\frac{\sqrt{2}}{a_n^3} < 0, \\ f''(b_n) &= \frac{1}{b_n^3} \{\sin(\log b_n) - 3\cos(\log b_n)\} = \frac{\sqrt{2}}{b_n^3} > 0 \end{aligned}$$

よって, $e^{2(n-1)\pi} < x < e^{2n\pi}$ において, $f(x)$ は, $x = a_n$ で極大値をとり, $x = b_n$ で極小値をとる.

(3) (2) の結論から, $\alpha_n = a_n$, $\beta_n = b_n$ より

$$\log \alpha_n = 2(n-1)\pi + \frac{\pi}{4}, \quad \log \beta_n = 2(n-1)\pi + \frac{5}{4}\pi$$

上の 2 式を (1) の結果に代入すると

$$f''(\alpha_n) = \frac{1}{\alpha_n^3} \{\sin(\log \alpha_n) - 3 \cos(\log \alpha_n)\} = -\frac{\sqrt{2}}{\alpha_n^3},$$

$$f''(\beta_n) = \frac{1}{\beta_n^3} \{\sin(\log \beta_n) - 3 \cos(\log \beta_n)\} = \frac{\sqrt{2}}{\beta_n^3}$$

数列 $\{f''(\alpha_n)\}$ は初項 $-\sqrt{2}e^{-\frac{3\pi}{4}}$, 公比 $e^{-6\pi}$ の等比数列であり,
数列 $\{f''(\beta_n)\}$ は初項 $\sqrt{2}e^{-\frac{15\pi}{4}}$, 公比 $e^{-6\pi}$ の等比数列であるから

$$\sum_{n=1}^{\infty} f''(\alpha_n) = \frac{-\sqrt{2}e^{-\frac{3\pi}{4}}}{1 - e^{-6\pi}}, \quad \sum_{n=1}^{\infty} f''(\beta_n) = \frac{\sqrt{2}e^{-\frac{15\pi}{4}}}{1 - e^{-6\pi}}$$

したがって

$$\log \left| \sum_{n=1}^{\infty} f''(\alpha_n) \right| - \log \left| \sum_{n=1}^{\infty} f''(\beta_n) \right| = \log \frac{\sqrt{2}e^{-\frac{3\pi}{4}}}{1 - e^{-6\pi}} - \log \frac{\sqrt{2}e^{-\frac{15\pi}{4}}}{1 - e^{-6\pi}} = 3\pi$$

$$\text{よって} \quad \frac{1}{\pi} \left\{ \log \left| \sum_{n=1}^{\infty} f''(\alpha_n) \right| - \log \left| \sum_{n=1}^{\infty} f''(\beta_n) \right| \right\} = 3$$

■

6 (1) $f(x) = \sqrt{x}e^{-\frac{x^2}{4}}$ ($x \geq 0$) より

$$\begin{aligned} f'(x) &= \frac{1}{2\sqrt{x}}e^{-\frac{x^2}{4}} + \sqrt{x} \left(-\frac{x}{2}e^{-\frac{x^2}{4}} \right) \\ &= \frac{1-x^2}{2\sqrt{x}}e^{-\frac{x^2}{4}} = \frac{(1+x)(1-x)}{2\sqrt{x}}e^{-\frac{x^2}{4}} \end{aligned}$$

x	0	$\cdots$	1	$\cdots$
$f'(x)$		+	0	-
$f(x)$	0	$\nearrow$	極大	$\searrow$

よって、 $f(x)$ の最大値 M は $M = f(1) = e^{-\frac{1}{4}}$

(2) $0 < x \leq 5$ のとき、 $g(x) = \frac{f(x)}{\sqrt{x}}$ とおくと $g(x) = e^{-\frac{x^2}{4}}$

$g(x)$ は単調減少であるから $g(x) \geq g(5) = e^{-\frac{25}{4}}$ ($0 < x \leq 5$)

$$\frac{f(x)}{\sqrt{x}} \geq e^{-\frac{25}{4}} \quad \text{ゆえに} \quad e^{-\frac{25}{4}}\sqrt{x} \leq f(x)$$

上の第2式は、 $x = 0$ のときも成立するから、次が成立する.

$$0 \leq x \leq 5 \text{ のとき } e^{-\frac{25}{4}}\sqrt{x} \leq f(x) \quad (*)$$

(*) より

$$\begin{aligned} \alpha &= \int_0^5 f(x) dx \\ &\geq \int_0^5 e^{-\frac{25}{4}}\sqrt{x} dx \\ &= e^{-\frac{25}{4}} \left[\frac{2}{3}x^{\frac{3}{2}} \right]_0^5 = \frac{10}{3}\sqrt{5}e^{-\frac{25}{4}} = \frac{10}{3}f(5) \end{aligned}$$

よって $\frac{10}{3}f(5) \leq \alpha$

(3) $\frac{2}{3}f(5) \leq t \leq M$ において

$$\begin{aligned}
 \frac{V(t)}{\pi} &= \int_0^5 \{f(x) - t\}^2 dx \\
 &= \int_0^5 f(x)^2 dx - 2t \int_0^5 f(x) dx + t^2 \int_0^5 dx \\
 &= \int_0^5 x e^{-\frac{x^2}{2}} dx - 2\alpha t + 5t^2 \\
 &= \left[-e^{-\frac{x^2}{2}} \right]_0^5 - 2\alpha t + 5t^2 \\
 &= 5t^2 - 2\alpha t + 1 - e^{-\frac{25}{2}} \\
 &= 5 \left(t - \frac{\alpha}{5} \right)^2 - \frac{\alpha^2}{5} + 1 - e^{-\frac{25}{2}}
 \end{aligned}$$

ここで, (2) の結果より $\frac{2}{3}f(5) \leq \frac{\alpha}{5}$

また, $\alpha = \int_0^5 f(x) dx \leq \int_0^5 M dx = 5M$ より $\frac{\alpha}{5} \leq M$

$\frac{2}{3}f(5) \leq \frac{\alpha}{5} \leq M$ であるから, $V(t)$ は

$$t = \frac{\alpha}{5} \text{ のとき, 最小値 } \pi \left(-\frac{\alpha^2}{5} + 1 - e^{-\frac{25}{2}} \right)$$

をとる. ■